



発行所
新潟市西船見町浜浦
日本海区水産研究所
印刷所
株式会社 第一印刷所

日本海

水産の研究では生物の分布と海洋構造との結合が特に論議されている。勿論この研究自体は古くから行なわれてきたものであるが、両者の結びつけ方や考え方については多くの議論があり、これからの最大の研究課題であるといえよう。一般的にいうと、従来の研究では生物の生活段階別の分布の様相と水温、塩分等の物理的環境から作られた図とを重ね合わせ、考察がすすめられてきたように思われる。即ち、生物と海洋とは離れた形をとっていたと考えられる。

生物環境とその海洋研究

藪田洋一

しかし、生物と環境との密接な関連性は、研究者が常に認め注目しているところでもあつた。また、生物自体の生活段階でそれぞれその環境をえらび、特殊な段階では異つた環境である水域へと移ることも知られている。また、これらの環境が生物の再生産とも結合していることも知られているが、その度合は不明である。これらの知見は生物分布と海洋観測調査が同時に行われた場合でも、それぞれの結果を対象比較したところから生れてきたと極言することが出来るのではなからうか？

第一には、秋冬期の天候不良による調査の困難性があり、予定航海日数には予め冬の荒天日数を含めても足りないことである。

第二に対象魚種としたマサバ群の減少により、分布やその密度に関する情報が殆んど得られなくなつたことであり、第三には調査船が小型過ぎることである。

これは過去における日本海の水産研究の冬季間の知見の空白を意味するものでもあり、これを埋めることが必要である。勿論、生物と環境の研究は車の両輪の如く、何れが欠けても研究にはならないが、現在のところではサバの減

からではないだろうか、こんな意識は薄れて行き、水産の研究という一本の柱にするように夫々努力したいものである。

さて、日本海をみてみると、このような研究を行なうに最適などころと思われる。我々は一つの課題として、秋から冬にかけて日本海北部沿岸に発生する南下流は、南下する魚群の道に当るものであるという一つの想定をたてている。この想定を実証しようとして、南下流の発生とその機構を把握し、特に南下流と関連が深いと考えられるマサバの移動とかみ合わせて研究を進めている。しかし実際に始めてみると困難な点が多くでてきた。

方の解明であり、生物からも、あるいは海洋からも、可逆的に言える段階にすることが望まれる。資源研究、海洋研究は同じ海という共通の場で行なわれ乍ら、その研究自体に結付きの少ないのは、夫々が私は生物、私は海洋の研究

少によつて、問題を生じてきた。しかし、海洋学的に解明することも一つの段階として重要であるので、調査研究を推進しており、知見も多く得られつつあるので、これからの研究に期待しているものである。

日本海の冬期調査を計画実施する度に感じることは、最近話題になり、色々と努力されている潜水調査船の実現出来る。少々の荒天でも潜水して調査が可能であろう。

これが実現すれば、生物や海洋の研究者が乗つて、海中を走り廻ることによつて生物環境に関する研究も思わぬ発展をするのではなからうか。

(日水研開発部長)

主な項目 — 第183号 —

- 生物環境としての海洋研究 … 藪田洋一
- 水産試験場と云う名称 …… 藤本隆二
- 小型漁船の自動イカ釣機械普及について
- 秋田県漁村ひとりあるき
- 第2話 「出嫁ぎ哀歌」 …… 王悟道
- 魚探

水産試験場と云う 名称

藤 本 隆 一

吾々の職場を水産試験場と呼ぶ。英文で書く場合には Fishers Experimental Station と書く。私はこの名称を商業水産試験場、英文では Commercial Fisheries Experimental Station と改めたほうが良いと思う。そもそも水産試験場と云う名称は、明治年間に、まだ水産業が未開の姿の頃に附与されたもので、日本敗戦を境に、各産業とも目覚しい発展を遂げ、わが水産業も他部門におくれをとつているもの、かつて水産試験場と銘打つた試験機関が、出来た頃とは、雲泥の差がある程に変わつてしまつた。

昔水産試験場が出来た頃は、沿岸にも沢山の魚介が居り、水産業の経済的社会的な地位も低く、幼稚な漁業知識で事足りた開明期であつたから、水産試験場の仕事も、漁業者と異つた新しい道具だの方法で、ただ魚を獲つて見せる、加工して見せる。と云う簡単なことだけで、漁業者は驚嘆し、瞠目し、向上の刺激となり、当時の試験場の業務としては、それだけでさえ充分であつた。云はば魚を獲ること、つくることだけを考へていればよい時代であつた。その頃の水産業は、他の産業とはきり離された存在で、経済的にもむしろ特異な存在でもあつたからによるのであろう。

ところが敗戦後の日本は、ありとあらゆる産業が近代化され、国民の社会生活が復

雑化されるに従つて、各個の産業は緊密な横の連携なしには、たちゆかない状態となつて、水産業も亦、好むと好まざるに拘らずこの渦中に入り、昔のように独善を樂しむとか、一般産業と違つた社会に「アグリ」をかいていくわけにはゆかなくなつてしまつた。いきおいその指導の任にある水産試験場も、ただ獲つてみせるだけ、つづつてみせるだけと云う原始形態では事がすまなくなつた。単的に云えば水産試験場は、何処で、どう云う方法で、どう云う魚を獲り、どのような経営規模で、どのように経営したら、その漁業は企業としてペイするか、又、この漁業はどのようにしたらもつと儲かるようになるかと云うところまで突込まねばならなくなつたし、そういう風になつてこなければ、存在価値はなくなつてきた。

大きい船なら大きいなりに、小さければ小さいなりに、コマーションベースに乗るような工風を研究する事が当然の務めとなつた。自県の業者の及びもつかない立派な船だの高価な器具資材を使つて、仮令魚を獲つても、金に糸目をつけずに高価な方法で魚を獲つたと云うだけで、もはや昔のように、業者向上の刺激とはならない。それは水産試験場自体の考へ方が前近代的であり、厳しい現実社会におかれては、漁業者とは、全く遊離してしまつていて、生半可な象牙の塔の中の独善としか映らないことに外ならないからである。

かつて、各県水産試験場の場長達が集つて「地方水試の在り方」などと云つて論議した事があつた。それは地方の水産試験場

が時勢に即応した態勢をとらないで具体的な性格、目的がアヤフヤであり、自主的な仕事をせず、海区水研の指示によつて動く、全く水研の出張所化していた情ない状態であつた事と、水研職員自体も、県の水産試験場を自分の研究所の出張所位に思つていた事、この二つの誤りが錯綜して、このよう論議までしなければならなくなつたものであろう。

海区水研は、県の水産試験場に、委託金と云う名の予算を与えて、本来自分達の研究資料の蒐集に当らせる。(外交辞令としては大変町重であるが) 又県水産試験場の職員は、まるで、本店の仰せにかしこまる商社の社員のような卑屈な態度で、唯々諾々するだけである。このような相互の悪い意識は、かつてよりだに減つたとは云え、未だ未だ払拭されてはいない。大きくは日本の水産のために、小さくは各県の水産のために、まつたく憂うべき事だと思ふ。

この悪い意識をとり払う一取段として、各々がその分野でする仕事の本質の目的が、異質であると云うことを鮮明にするために、まづ、まさらわしい名称を改めたらよいと思ふ。少くとも県水産試験場の名称の前に、商業とか、英文の場合には Commercial という字句を冠して、県の水産試験場は、その県の実状にあつた企業としての水産の研究とその過程において必要とな試験研究を行うのであり、海区水研は純粋な自然科学の立場から広い視野で、その海区の研究に没頭するのだ、と云う旗色を鮮明にすれば、県水産試験場は、自然と水

研の出張所的存在から脱却して、内容も変わつてくるであらうし、又「地方水試の在り方」などと云う変な論議もおきなくてすむ筈だ。

そうすれば今、業界から無用の長物視されてはいる試験場も、やがては業者から頼りにされる試験場に生まれ変わるであらう。何よりもせつかく網めた税金が生きてくると云うものである。

(筆者 秋田水試技師)

小型漁船の自動イカ釣機械 普及について

この投稿は富山県沿岸漁業改良普及員島崎藤助技師からよせられたものですが、内容の全文はすでにラジオ放送および「みなと新聞」に公表されてありますので、ここではその要約を掲載することにしました。

富山湾は海岸線が短かく、かつ屈曲に乏しいうえ、海底の傾斜が急なため、大陸棚に恵まれず沿岸漁場の狭あいなところから、他県と比較し沿岸漁業は低調である。魚津市の動力漁船数は三級船七八隻、二級船(五一九ト)五四隻(一〇一一九ト)四隻、(二〇ト以上)一四隻で、そのうち三一五ト階層の漁船主が魚津発動機組合を組織しており、この階層の漁船が五月中旬から八月中旬の間、夏イカ一本釣に従事し、重要漁業の一つとなつている。この夏イカ漁は漁期が短かく、また例年湾

内への回遊が薄いため遠く佐渡海域および能登沖まで出漁している現状である。

零細な沿岸漁村の通例で、ここでも漁業従事者の減少と老令化はなんとしても阻止できず、これらをおぎなう目的で機械導入を考へ、先進地および製造工場の視察を行なった。

四〇年度は四二隻中約半数が機械投入にふみきつた。全自動方式(以前のイカ釣機は乗組員が機械のかたわらでこれを操作しなければならなかつた)であるので、人員が削減され、釣り上げ作業は機械が行なうので、乗組員はその後の漁獲物の処理を行なえばよく、また漁が悪くても終夜不寝番釣をする必要がなく、一応初期の目的を果してくれた(漁業者は一漁期で設備費の二分の一は還元されたと述べている)。四〇年度の漁況は比較的悪く遠距離操業のため出漁日数が減少し、漁業経費の増加によつて一隻当りの所得は少なかつたが、全期間を通じ機械の能力は〇・七〇・八人分であつたと評価された。操作に当つては不馴れから、釣ばりのもつれ、切斷、故障など若干あつたが、しかしこれも習熟するに従ひ解決する問題であり、濃密群に当れば三〜四人分は釣つてくれるであろうことは全員の是認したところであつた。ただ、薄漁のとき、荒天のとき、上下層の潮流が相反する場合は十分に活躍してくれない。このことが今後の課題として残されている。

四一年度は前年の成果から四八隻に計五四台の機械投入となつてあらわれた。

秋田県漁村ひとりあるき

第二話『出稼ぎ衷歌』

王 悟 道

古文書によれば秋田県からの集団出稼ぎは幕末の頃より始まり、出稼ぎに行くためには郡奉行所に申出で藩庁から証明書を出して、遠く北海道の松前、江差、増毛、さらには離島の天売、焼尻方面のニシン漁場に出かけて行き、すでに一世紀以上の時が流れている。

今では、どこへ出稼ぎに行くにも交通機関が発達しているのに、楽にでかけられるが、不便であつた明治中期(十九世紀)までは北海道へ行くには、七呎三尺の川崎舟で、十四〜十五反のゴサツボ(莫摩帆)をかけた木ツ葉舟に乗り、命がけて舟を操りながら春の彼岸の一週間前(三月十五日頃)、男鹿半島の人里に椿の花が、まだ咲きそめぬうちに部落の浜辺を発つて行くのである。「今にして想へば夢の様な気がする」と部落の古老は強い秋田訛でポツポツと語つてくれた。

いよいよ出立という日は朝早くから陸でユツトコヤクチナベに酒を沸し、しばしの別れの酒をくみかわした。舟が岸を離れる時は涙ながらに渚にただずむ女房達は、我を忘れて、かぶつているものを振るもの、手を振るものさまざまで、「オドオ(貴方)大漁してけやア」と叫ぶと漁夫達は舟の中から「アア(女房)マメ(遠者)でいれやア」と答へ、この瞬間ばかりは、いくら鼻についた、みにくい女房でも、いとしさやいじらしさが胸にこみあげてきて、やるせないものであつたという。

以前、私はよく漁業指導とか、講習会とかで漁村をまわりましたが、漁師のなまの音がきかれ、とくに彼等の長い経験の中からとらえた話をきくことができるので、私共の仲間も地方巡業と称し、辺りなど出かけたも新しい知識が入るので喜んで出かけたものでした。

読者諸氏のうちで、このような仕事をした人は、多分おおかれ少なけれ経験があると思うが、話を終えて質問をうける段になると漁師の質問は面白いもので、必ずといつてよくらい、長い自分の経験のうち、絶対と自信のあるものを、なお一層確認するように、また我々をあたかも試験するような形で質問してきます。それに対し彼等の考えていることと同じような答をすると「今度の講師の人はよく知っている」と合格点が与えられ、そのあとは我々の質問などに、とても積極的協力し、大きな収穫を得ることがある。あるとき、どうしても彼等の考えていることを違ふと思われ、答を出さねばならなかつたことがありましたが「今の質問に対し、こう答へれば皆さんはそれとおりと喜ぶだろうが、どつこい問屋はそうはおろしてくれない。本当はこうなんだ」というように話し、大笑いのうちに目的を達したこともありました。

我々研究者はどうしても現場の声をきくチャンスが少なく、独善的になりやすい。とくに日本海は、魚種が多く、地域が広く、漁業種類、操業規模が複雑であるなど、非常に研究を困難なものにしていく。我々はあらゆる機会をとらえ、積極的に現場の人々との接触にとらえ、ほんのちよつとの心がけて眠つてはいるがまだ沢山の得がたい情報をつかむことができ、これが研究発展に大いに役立つことは想像にかたないものと思う。

(Y・T生)

魚 探

いた。舟は男鹿を離れるまでは、沖合半里、そのほかは六〜七里の沖を航走した。こうして毎年幾度か北海道のニンシ場所を巡っている間には舟もろとも葬り去られるような危険に遭遇するものである。海が荒れると船頭は陣頭指揮で帆柱を例して舟ばたにゆえつけ、小柱二本を舟ばりにしばり付けた、激しく荒れてくると舟ばりに百五十〜二百尋の長さの綱を三〜四本しばつて流した。それでも、どうにもならない時は、舟を陸に向けてどこの浜でも、かまわず舟を引あげ、海岸の砂浜に積つた雪をかきわけて、サキリ、ヤカタザオを材料にして丸太小屋を作り、風の強い時は丸小屋の真中に米俵をつつて、とばされない様にぐるまつて寒さから身を守つた。

舟は松前で二日程休養をとり、次は江差に入った。ここで丁度彼岸になるので、当時は江差で彼岸の餅をたべる習慣があつた。ニンシ場では親方の下(なかと)に歩方(ふかた)と雇(い)があつた。歩方で行くのは仲々(なつか)むずかしかつた。歩方の中からヤクピト(やくびと)がつくられ大船頭、副船頭、陸(りく)にいて人(ひと)を使う陸廻(おまわ)り、舟の中の小使である磯舟乗、起舟船頭(おきふねづな)などがあつた。

賃金は雇(い)で十六〜十七円(明治二十七年八年頃)であつた。出稼ぎの帰りは旧の六月末から七月十日までで番屋(ばんや)は現地の人を雇い管理させて帰るのだが、番屋守(ばんやし)は仲々良い待遇(たいご)をうけたので、皆(みな)やうたがつたものである。やがて舟が故郷(こきやう)の浜(はま)に近(ちか)づくとき、陸(りく)では「松前行(まのりゆき)が来たぞぞ」と叫んで歩き、浜(はま)は急に賑(にぎ)かになり、女房(によう)、子供遣(こどもぢや)

はとるものもとあえず集つて出迎えた。漁夫遣(りくぢや)は持つてきた土産(みやげ)のミガキニンシを分け、まず今年も無事(むじ)であつたと喜び合うのであつた。

戸賀(とが)の潤(うる)にヤンサヤンサの音(ね)聞(き)ければ

寄せたオボキも手(て)につかね

ハア よせたオボキも手(て)につかねとや

これは出稼(いでか)ぎに行つた夫(つま)や子(こ)を待ち焦(こ)れる

氣持(きもち)を「白引(しろひき)」に唄(うた)われたものである。

はげしい海の労働(らうどん)を終えた夜のせめてもの慰(なぐさ)めは故郷(こきやう)の香り高い濁酒(にごり)であり、唄(うた)であり、女房(によう)子供遣(こどもぢや)の安心(あんしん)しきつた顔(かほ)である。

そしてそこに流れるいい知れぬ哀傷(あいそう)と他愛(たあい)もないエロチシズム(eroticism)があつた。

(筆者 秋田県水試技師)

日本海西部プロツク漁海

況予報会議

九月八、九日、福井県(ふくい)美浜(みはま)において西部六府(ろくほ)県(けん)担当(たうとう)者(しや)、日水研(にっすいけん)加藤(かとう)藤(ふじ)田(た)両(りやう)部(ぶ)部長(ぶつちやう)および全漁連(ぜんりくれん)漁海況(りくかい)センタ(せんた)ー堀内(ほりうち)氏(し)を加え、表記(ひょうじ)の会議(かいぎ)が開催(くわいさい)された。議題(ぎ)は次のとおりであつた。

イ 春夏(しゅうげ)季(き)の漁海況(りくかい)の経過(けいこ)検討(けんたう)

ロ 長期(ちがう)漁海況(りくかい)予報(よほう) (一〇―一二月)の討議(たうぎ)

ハ 漁海況(りくかい)予報(よほう)論(ろん)に關する意見(ごいけん)交換(こうかん)

ニ 漁海況(りくかい)予報(よほう)事業(じぎやう)の基(き)本(ぽん)的(てき)方(はう)向(きやう)と将来(さうらい)の構想(こうきやう)について討議(たうぎ)

ホ その他

議題(ぎ)のうち、とくに漁海況(りくかい)予報(よほう)論(ろん)について、活発(かつぱつ)な意見(ごいけん)の交換(こうかん)がなされた。

日本海北部プロツク漁海

況予報会議

九月一三、一四日、日水研(にっすいけん)において北部六府(ろくほ)県(けん)および日水研(にっすいけん)担当(たうとう)者(しや)、全漁連(ぜんりくれん)吉田(よしだ)氏(し)を加え、表記(ひょうじ)の会議(かいぎ)が開催(くわいさい)された。議題(ぎ)は西部(せいぶ)プロツク(protok)会議(かいぎ)と同じであるので省略(りやうじやく)する。(議事録(ぎじろく)は西部(せいぶ)、北部(ほく)両(りやう)プロツク(protok)会議(かいぎ)の模様(もよう)を合(あ)せて印刷(しんぷつ)でき次第(しだい)送付(せうぷ)いたしま(す))

(日水研)

ズワイガニ調査研究成果のとりまとめと今後の調査計画についての検討会

一〇月六日、日水研(にっすいけん)において関係(くわんがい)八水試(はっすいし)の担当(たうとう)者(しや)の参集(さんしゅう)を得(え)て、表記(ひょうじ)の検討(けんこう)会(かい)が開催(くわいさい)された。

近年(きんねん)ズワイガニ(ズワイガニ)の底曳(ぞい)漁業(りくぎや)に占(お)める位置(いち)は非常(ひじょう)に大き(お)くなつたが、ズワイガニ(ズワイガニ)に關する過去(かこ)の研究(けんぎゅう)はほとんど断片(たんぺん)的(てき)なものでその数(かず)も極めて少(すく)なかつた。昭和(しやうわ)三三(さん)八年(はち)に日水研(にっすいけん)中心(ちゆうしん)に日本海側(にっぽんかいがわ)関係(くわんがい)府(ふ)県(けん)水試(すいし)の連繫(れんけい)のもとに調査(さうさ)研究(けんぎゅう)がすすめられ、現在(げんざい)にいたつており、この間(ま)回数(かいすう)多(おほ)くの成果(せいこ)がいろいろの機会(きかい)に發表(はつぱ)されてきた。

満二(まんに)年(ねん)を経(けい)過(か)して、ズワイガニ(ズワイガニ)の研究(けんぎゅう)の現状(げんじやう)とその成果(せいこ)を再整理(さいせいり)し、問題(もんたい)点をうきほりにして、今後(こんご)の研究(けんぎゅう)の焦点(しやうけん)とその進め方(はう)を各(かく)研究者(けんぎゅうしや)が再認識(さいにんしき)するためこの企画(きかく)がなされた。結論(けつろん)を要約(ようやく)すると、

一、日水研(にっすいけん)で出来るだけ早(はや)い機会(きかい)に綜説(そうせつ)を書きあげること。

二、綜説(そうせつ)には研究者(けんぎゅうしや)の意見(ごいけん)が十分(じゆうぶん)あらわれるよう、意見(ごいけん)に相違(さいち)がある場合は、どの点(てん)まで同意(どうい)見(けん)で、どこが違(ちが)つているかをとくに丁寧(ていねい)に書き、問題(もんたい)点(てん)となるところを述べるようにする。

三、各水試(かくすいし)からは、夫(つま)々の県(けん)のズワイガニ(ズワイガニ)を対象(たいさう)とする漁業(りくぎや)種類(しゆり)類(れい)、漁期(りくき)、主漁場(しゆりちやう)および漁獲(りくかく)量(りやう) (努力(どりよく)量(りやう)、銘柄(めいぐら)別(べつ)漁獲(りくかく)量(りやう))をと

りまとめて日水研(にっすいけん)へ連絡(れんらく)する。

四、その他、とりまとめ要綱(ようきやう)案(あん)のうち、とくに意見(ごいけん)のあるところについては各水試(かくすいし)で見解(けんげ)を整理(せいり)のうへ送付(せうぷ)する。

五、県水試(けんすいし)報告(ほうぎやう)、学術誌(がくじゆつ)その他(その他)に報告(ほうぎやう)した場合はそのリプリント(リプリント)などを早急(はやきゆう)に日水研(にっすいけん)へ送付(せうぷ)する。

六、綜説(そうせつ)原稿(げんこう)ができてから次第(しだい)、検討(けんこう)会(かい)を開催(くわいさい)して討議(たうぎ)をするか、各水試(かくすいし)へ送付(せうぷ)して意見(ごいけん)を再整理(さいせいり)するかの方法(はうほう)で検討(けんたう)する。

以上(いじやう)が確認(かくにん)され、残余(ざんじゆ)の時間(じかん)で、生(なま)長(なま)脱皮(だつひ)産卵(さんらん)など(な)について意見(ごいけん)の交換(こうかん)と、今後(こんご)各水試(かくすいし)で予定(よてい)している調査(さうさ)研究(けんぎゅう)の内容(ないよう)がそれぞれ示(し)された。

(日水研)

あとがき

所長(じやうちやう)が東南(とうなん)アジア(asia)の視察(しさつ)を終(お)え、無事(むじ)一〇(じゆ)月(げつ)四(に)日(にち)帰国(きこく)いたしました。次号(じきごう)より各(かく)國(こく)の水産(すいさん)事情(じじやう)、研究(けんぎゅう)状況(じきじやう)その他(その他)興味(くわんみ)ある風物(ふうぶつ)など(な)について執筆(てんしつ)される予定(よてい)です。

(係)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆